

## 中学校・高等学校音楽科の学力を確かなものとする 教育プログラムの開発（2）

三村 真弓 光田龍太郎 桑田 一也 松前 良昌  
高旗 健次 藤井 恵子

### I. はじめに

音楽学習は、「わかる」（認知）「できる」（スキル）「感じる」（情意）によって成り立っている。これらがどのように関連し合い、学習を成立させていくのかという問題は、非常に興味深い。この3つの面が、どれか1つに偏ることなく、バランス良く学習者によって学習されることが音楽科授業の理想の姿であると考えられる。しかし、現実の授業では、どれかが欠けたり、どれかに集中したりすることが多い。中学校・高等学校音楽科授業において、学習者の情意面に配慮しつつ、認知面やスキル面での学習成果をも高めることが、音楽科の学力を向上させることにつながる。

広島大学の各附属中学校ならびに各附属高等学校の音楽科では、それぞれの授業者が特色ある授業を行っている。A中・高等学校では「わかる」ことを重視して、B中学校では「できる」ことを重視して、C中学校では「感じる」ことを重視して、学習を進めている。しかし3校とも、1つの面だけにとどまてはいない。重視する面は授業の重要な視点ではあるが、結果的にはほかの2つの面をも達成している。

そこで本研究では、それぞれの授業者の特色ある授業の概要とその成果を明らかにすることを目的とする。これによって、中学校・高等学校音楽科の学力を確かなものとする教育プログラム開発への示唆を得たい。（三村 真弓）

### II. サイエンスプログラムの取り組み—音や声の仕組みを探ろう—（A高等学校）

#### 1. 研究の趣旨

われわれが普段日常で接したり使っている音や声は、漠然と感覚的にとらえていることが多い。音楽に関しても、表現や鑑賞などに楽器の音や歌声などの要素は欠かせないものであるが、その原点となる音や声

がどのように生まれ、様々な音楽へと変化するのかということについて深く考える機会は少ないのではないだろうか。

そこで、音や声についてその仕組みや特徴を科学的な視点から探っていき、生徒たちが体験を通して理解することで、より深い鑑賞活動を目指すとともに、幅広い音楽表現に生かしていくことを目標としてこのプログラムを実施した。

そしてさらに一歩進め、生徒たちが探究していく中で生じてくる様々な疑問に対して、自ら解決しようとする姿勢や態度を養っていくこともねらいとした。

#### 2. 研究の目的・方法

このサイエンスプログラムは高校1年生の総合的な学習の時間で行った。芸術3科（音楽・美術・書道）が各クラスを5時間ずつ担当し、それぞれの教科の特色を生かした授業を展開した（指導計画は次頁）。

音楽科の授業のポイントとしては主に次の3点が挙げられる。

①一方的な講義形式にならないようにし、様々な場面で疑問を投げかけ、生徒自身が考える態度を身に付けることを重視した。そのことにより、新たな疑問やもっと知りたいことなどが次々と生まれることをねらいの1つとした。

②音響や発声に関する説明は物理学、医学等の分野も関係してくるが、なるべく専門的になりすぎないように留意した。しかし、横隔膜が動いている様子のレントゲン映像や、内視鏡カメラで声帯が振動している様子を収めた映像は、初めて目にする生徒がほとんどで、非常に効果的だった。

③実体験を重視し、実際に楽器に触れて音を出させたり、様々な発声で歌唱させたり、一例を挙げれば、生徒にヴァイオリンを弾かせ弓が弦を振動させる様子を確認

Mayumi Mimura, Ryutaro Mitsuda, Kazuya Kuwata, Yoshimasa Matsumae, Kenji Takahata, Keiko Fujii: The development of educational program for ensuring academic ability of music in junior high school and high school.

指 導 計 画 (実施時間：全5時間)		
配当時間	学 習 内 容	指導上の留意点
楽器の音の出る仕組みを探る。 (3時間)	1. 導入 ①音とは何か、音の性質について考える。 ②音階の仕組みや平均率、純正調を考える 2. 弦楽器の音が出る仕組みについて理解する。 ①擦弦楽器の原理を探る。 ②他のいろいろな弦楽器に触れ、音が出る仕組みや、音色の特徴などをつかむ。 3. 管楽器の音が出る仕組みについて理解する。 ①紙でイカ笛やストローオーボエを作り木管楽器のリードの原理を探る。 ②マウスピース、ホース、じょうごを使い、金管楽器の原理を探る。 4. 打楽器の音が出る仕組みについて理解する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>音は物体の振動が振動波となって空気を振動させてできることを、音叉、大太鼓、うなり木などを使って示す。</li> <li>平均率と純正調を実際に聞いて違いを比較する。</li> <li>ヴァイオリンを実際に弾かせ、弓が弦を振動させる様子を体験させる。</li> <li>様々な弦楽器に触れ、自由に音を出させる。</li> <li>オーケストラで用いる弦楽器のみでなく、民族楽器についてその特徴や文化の違いを考えさせる。</li> <li>木管楽器と金管楽器の吹口やリード、マウスピース部分の仕組みについて説明し、実際に吹いてみて理解を深めさせる。</li> <li>金管楽器の音程を変える仕組みを、図や演奏を通して理解させる。</li> <li>打楽器を体鳴楽器と膜鳴楽器に分類し、様々な打楽器に触れながらその仕組みを理解させる。</li> </ul>
発声の仕組みを探る。 (2時間)	1. 発声のメカニズムを探る。 ①声が出るまでの流れを、呼吸器官、発声器官、共鳴器官のそれぞれについて理解する。 ②音色を決める要素について理解する。 ③割り箸発声法を体験する。 ④オペラ歌手の鍛え上げられた発声の例を鑑賞する。 2. 世界の様々な発声や歌声を理解する。 ①ホーミー、密教の声明、地声発声、ヨーデル、カウンターテナー、ケチャなど多種多様な音楽を鑑賞する。 ②ホーミー、ヨーデル、ケチャを実際に体験する。 3. 単元全体の学習のまとめをする。 ①理解したことや疑問点、感じたことなどについて ②自己評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>息の流れや肺・横隔膜の動き、声帯の振動の仕方、共鳴腔などについて、映像や図を見ながら理解させる。</li> <li>音色や発音を決める声帯や共鳴腔の動きを映像や図を見ながら理解させる。</li> <li>喉頭蓋が上がることで高い声が出やすくなることを割り箸を使って体験させる。</li> <li>オペラ「魔笛」の中からコロラトゥーラソプラノ(夜の女王)とバス(ザラストロ)、テノール(タミーノ)のアリアを鑑賞させる。</li> <li>なぜそのような多様な発声や歌い方が生まれたのか、民族や文化の違いの面から考えさせると同時に、その違いの面白さを楽しむ。</li> <li>その場ではできなくても、どういうものかを理解させることにとどめる。</li> <li>音や声の仕組みに関する科学的な知識をもとに、自分がどのようなことを探求し、問題解決していくかを中心にまとめさせる。</li> </ul>

かめさせたり、紙でイカ笛というものやストローでオーボエに似た笛を作って木管楽器のリードの原理を体験したり、マウスピース、ビニールホース、じょうごを使って金管楽器の原理を体験する活動などを行った。また、世界の多様な発声の体験では、鑑賞の後でホーミーやヨーデル、ケチャなどの発声や歌い方にチャレンジした。

実際の授業では、まず最初に「音とは何か」というテーマで、物理学の面から音を取り上げ、音の性質や音階の仕組みなどを理解することから始めた。

次に楽器に関しては、いろいろな楽器の構造と音(音色、音域、音の出し方など)との関わりの中で、実際の楽器を用いたり、その構造を模したものを用いたりして、体験的にその音が生まれる仕組みを探った。ま

た、様々な楽器の特徴を知ることにより、音楽表現や鑑賞に生かしていくことを大きな目標とした。

声に関しては人間の体の発声器官（肺、声帯、共鳴腔など）と声（声質、声域、声の出し方など）との関わりの中で、映像などをもとに発声の仕組みを探り、世界中の様々な歌声を鑑賞したり、そのいくつかを実際に体験したりした。とくに人体の構造や様々な発声器官の仕組みを理解した上で、実際に横隔膜呼吸やよりよい発声にトライすると、生徒たちは大変意欲的に取り組んでいた。これは研究の目的の1つである、歌唱表現に直結するものであり、科学的な知識の獲得が表現活動の関心・意欲を引き出したものといえる。

### 3. 成果と課題

生徒は毎回学習した後に、「わかったこと、感じたこと、疑問に思ったこと、もっと知りたいこと」などについて記述し、最後にはまとめとして自己評価を行った。

それらの記述や、授業中の活動の様子から、多くの生徒がこの単元に高い興味と関心をいただき、積極的に活動に取り組んでいたことが感じられた。普段自然に接していて疑問をもつことの少なかった「音」に関する新しい発見をしたり、日頃触れることのない楽器に触れて音を実際に出してみたことは、生徒にとって新鮮な驚きであったようである。また生徒は、人間の「声」に関して、声を出すこと自体があたりまえすぎて、その仕組みについて考える機会は今までほとんどなかったが、非常に複雑な仕組みから成り立っていることや声のもつ可能性にあらためて気付いていた。また、生徒は音楽と科学との接点にも注目し、科学的な視点での新たな知識を身に付けていた。同時に、そこから「共鳴や倍音についてもっと知りたい」、「なぜ、地域によって歌い方が違うのか、地域と発声との関係について知りたい」、などというような疑問をもち、その問題解決を自らの課題としたり、「音や声の出る仕組みを学んだので、楽器を演奏したり、歌を歌う時にこの経験を役立てたい」というような、表現活動に生かそうとする姿勢が見られるなどの成果があがった。

しかし、疑問や課題意識をもつことはできたが、その段階にとどまり、実際にどのような道筋で問題解決をしていくかといった展望が見えてこない生徒が多かったため、活動の途中段階や、最後のまとめなどで「この課題をどういう手順で解決していくか」という問題解決力を重点においた内容を展開した。つまり、それまでは考える視点などを教師が生徒に提示し、与えられた道筋にそって生徒は探究活動をしてきたが、探究する対象を自分で設定し、生徒自身の力で課題の

解決をしていく力を付けることも大事であると考えたからである。

次に自己評価であるが、授業実施直後の4年生と実施後1年を経過した5年生を対象に実施した。

「科学的な知識が身に付いたか？」という設問では、多くの生徒が高い評価を示し、4年生では約9割、5年生では約8割の生徒が身に付いたと答えている。学年による若干の差は、おそらく授業実施後すぐの時点と、1年を経過した時点での違いと考えられる。次に「音楽のサイエンスの授業は歌唱や、楽器演奏、鑑賞をするのに役立ったか、またはこれから先、役に立つと思うか？」という設問に関しては7～8割の生徒が「役に立った、これから役に立つ」と答えていた。歌唱や楽器演奏と鑑賞とで差が生じたり、学年による差があるのではないかと予測したが、結果はどれもあまり差はなかった。しかし、個別の細かな設問では、4年生は鑑賞の分野、5年生は歌唱の分野でそれぞれ高い数値を示しており、これはサイエンスの授業での活動の様子や普段の音楽の授業における各学年の傾向と一致しており、それらが数値に反映されているものと考えられる。

一方、疑問をもち、それを調べて問題解決へつなげていくという点に関しては、予想を下回る結果となった。「音や楽器、声について疑問点や調べたいことが生じたか？」という設問ではどちらの学年とも7割近くの生徒が疑問点が生じたと答え、実際に授業後のレポートでも疑問点や調べたいことを具体的に数多く挙げていたが、それに対し、「実際に調べ、自分で解決しようとしたか？」という設問では実際にそうした生徒は4年生で約3割、5年生で約4割と大幅に減っていた。さらに「音楽のサイエンスの授業を通して、問題解決の力が付いたか？」という問いでは、両学年とも約半数の生徒が「付いていない。あまり付いていない」と答えており、カリキュラムをさらに改善する必要性を感じた。生徒のレポートの中に「内容の多さに反して、時間数が少ない」という意見もあり、消化不良の面もあると感じられるので焦点を絞った指導を行わなければならない。

また、音楽の表現活動、特に楽器演奏や歌唱の場においてはスキル面の重要性が切っても切り離せないものである。いかに問題解決能力の伸張を期待しても、生徒は「上手に楽器を奏でたい」「きれいな声で歌いたい」といった単純で直接的な目標が目に向くのが自然である。従って、例えば「この楽器はこういった構造なのでどのようにすればよい音が出るか？」とか「体をどのように使い、どのような呼吸法を練習したら豊かな声量になるか？」というような、生徒にとって表

現技能の向上に直接役立ち、しかも問題解決力につながるような投げかけをこれからも増やしていきたい。

最後に、高等学校での芸術の科目は音楽・美術・書道の内から1つを選択するため、例えば書道を選択すると、他の美術や音楽は卒業するまで授業で接することがないのが普通である。しかし、このサイエンスプログラムの授業を受けることによって、生徒は少ない時間ではあるが3科とも全部体験することができる。そのため、「普段とはまた違った芸術の時間を過ごすことができ、とても新鮮だった」という生徒の感想にあるように、このこともサイエンスプログラムの大きな特徴であるといえよう。(光田 龍太郎)

### Ⅲ. 校内合唱コンクールの取り組み (B中学校)

#### 1. 取り組みの趣旨

本校音楽科では、幅広い音楽活動を通して、常に聴き手を意識した主体的な表現を追求する中で、生徒の豊かな感性を育むことを目指している。本校では、1年に1度合唱コンクールを実施している。学年ごとに課題曲を決め、さらにクラスごとに自由曲を選択させ、計2曲を音楽の必修授業を中心として仕上げていく。

音楽活動を発表する場、つまり音楽表現を通して観客とのコミュニケーションを図る場をもつことは、生徒たちの練習を充実したものにし、その結果、生徒の演奏の水準も高まる結果につながると考える。

#### 2. 実践内容と指導方法

音楽の必修授業における合唱コンクールに向けての練習において、特に留意している点は以下である。

##### (1) 意識の改革

中学生は歌うことを恥ずかしがる。しかし、歌うことが恥ずかしいのではなく、歌わないのが恥ずかしいのであると意識を改革することが重要である。クラスの中の成員が1人で堂々と歌い、友人から称賛され、教師が評価すれば、生徒は歌わない自分が恥ずかしいことを痛感させられる。こうして堂々と歌える生徒が出てくれば、クラスの歌声が飛躍的に向上する。

##### (2) 選曲

選曲は、聴き映え、難易度、練習時間などを教師が考慮し、生徒に紹介している。楽曲が生徒の声域や編成に合わない場合は、教師が編曲する。

##### (3) 発声方法

声をしっかり出させるためには、生徒の心情や発達を考慮し、しっかりほめた上で、ヒントを与えたり、

プライドに問いかけたりして指導している。

呼吸法については、特に次のような声かけを常に行っている。

- ①足の裏をしっかり地面に付け、地球を感じる。
- ②地面からぶらあがった感じ。プリンみたい。
- ③内蔵を5cm下げる。
- ④おなかの底から、大型ポンプで息を送る。
- ⑤気管支はペットボトルぐらい広げる。
- ⑥のどと口の間を開ける。
- ⑦口の中はあくびが出る2秒前。

音高が下がる時は、以下のような動作をさせる。

- ①「アイーンをして」と言って、顔の前面で片手を水平にさせ、音を一定の音高に保つイメージをもたせる。
- ②片耳を片手でややふさがせ、自分の声を聴きやすくする。

#### (4) パート練習

授業時数が限られているので、パート練習は、クラスでの放課後練習を中心に行っている。見通しをもった練習ができるように、取り組み開始から本番までのスケジュールを事前に教師が提示する。

パート練習は、パートリーダーに全責任をもたせる。やる気のない生徒をやる気にさせるのもパートリーダーの責任である。またパートのメンバーの行動は全員で責任を負う。こうして、団結力と責任感が生まれてくるのである。

#### (5) 全体練習の指導

授業における全体練習は教師が中心となって指導することが多い。これは、可能な限り音楽的にも技術的にも高いものを実体験することを意図しているからである。体験してはじめて、そのすばらしさがわかる。クラスでの練習では、授業での体験をもとに、指揮者、パートリーダー、合唱責任者が指示を出している。

#### (6) 表現の工夫

全体練習で教師が指導する際も、一方的に指示しない。生徒が自らイメージして音楽づくりをするよう、配慮している。可能な限りお互いの声を聴き、生徒にも相互評価をさせている。以下はその具体的な方法である。

- ①パートリーダーだけ前で聴いてアドバイスする。
- ②教師が指揮する間、生徒指揮者にメモを取らせ、後で発表させる。
- ③3列のうち1列だけが前で聴いて、歌っている他の2列の全員や自分のパートのメンバーにアドバ

イスする。

- ④パートを混ぜて歌う。これにより、自分がどれくらい歌えているかどうかわかる。また、歌えるようになっていけば、他のパートがどういう動きをしているかがよくわかり、結果的に音程やバランスがよくなる。(松前 良昌)

### 3. アンケート調査結果と合唱の取り組みの成果

H20年12月に、2年生77名と3年生75名を対象として合唱の取り組みに関してアンケート調査を行った。質問項目1)～6)には、5段階(⑤非常にそう思う、④ややそう思う、③どちらでもない、②あまりそう思わない、①全くそう思わない)で回答させ、7)～9)には自由記述で回答させた。

- 1) 1年生の時に合唱をがんばりましたか。
- 2) 2年生の時に合唱をがんばりましたか。
- 3) 3年生の時に合唱をがんばりましたか。(3年生)  
3年生の時に合唱をがんばりますか。(2年生)
- 4) 合唱コンクールは感動しましたか。
- 5) 合唱コンクールを終えた後、やってよかったと思いますか。
- 6) 合唱をやってみて、上手に歌えるようになったと思いますか。
- 7) 歌う時に、気を付けなければならないことは何ですか。
- 8) 合唱する時に、大事なことは何ですか。
- 9) 後輩たちに、合唱についてアドバイスしてください。

アンケートの調査結果は、以下である。

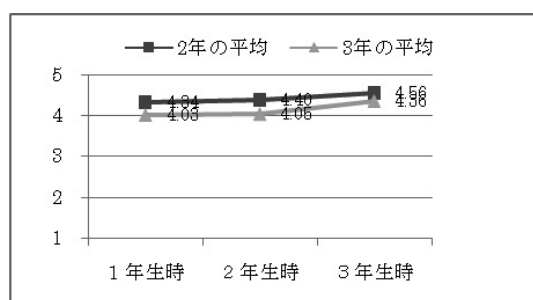


図1 合唱をがんばったか (がんばるか)

図1は、合唱をがんばったか (がんばるか) という質問項目の数値の推移を学年ごとに追ってみたものである。2年生も3年生も数値は4以上となっており、ほとんどの生徒ががんばったことがわかる。また推移の状況から、学年を追うごとにがんばる気持ちが上昇していることがわかる。

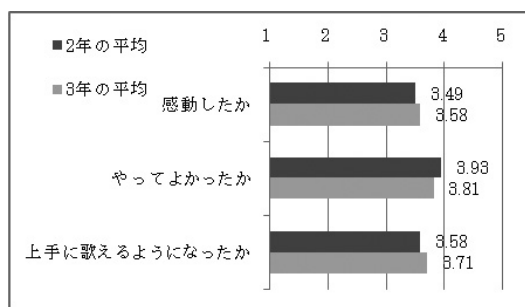


図2 合唱コンクールの成果

図2は、合唱コンクールから得られた成果である。「感動したか」「やってよかったか」は情意面の成果であり、とくに後者の数値は4に近い。ほとんどの生徒に達成感があったことがわかる。「上手に歌えるようになったか」はスキル面での成果であり、3年生の数値が2年生の数値より高くなっている。中学3年生で3.71という数値は、通常よりかなり高いと考える。

質問7は、歌唱時のスキルに関する質問事項である。同じような内容で多数の回答があったものを列挙する。姿勢に関する記述は「足を肩幅に開く」「ずっしり立つ」、発声に関する記述は「お腹から声を出す」「内蔵を下げる」「のどにレモンが入るくらい開ける」「気管支にペットボトルが入る感じ」「あくびをする2～3秒前」「合唱の声」「声を遠くへ届くように出す」等であった。教師が授業の中で常に声かけしている注意事項がしっかりと定着していることがわかる。

質問8は、合唱時の留意事項に関する質問事項である。スキル面に関する記述は、質問7の回答と同様のもの以外に「周りの音をよく聴いて全体のバランスに気を付ける」「1人ひとりがきちんとした声を出す」「きちんとハモっているか、音量の調節」「指揮を良く見る」、情意面に関する記述は「恥ずかしがらない」「みんなの気持ちを1つにする」「自分中心でなく全体のことを考える」「パートリーダーの指示に従う」「同じパートの人と気持ちを合わせ自分から積極的に出ようという気持ちをもつ」「気持ちを込め、聴いている人に伝わるように歌う」等であった。「恥ずかしがらずに歌う」は、教師が入学当初から強調している重要事項である。パートに関することを書いている生徒も多く、パート練習の重要性を認識していることがわかる。

質問9は、合唱コンクールで得られた成果を生徒たちがどう感じているかを問う質問事項である。質問7と8と重複する回答が多々あったが、それ以外の記述として、「自信をもって、楽しく歌ってください」「とにかく歌うことを好きになって、楽しんでください」「しっかり練習していけば良い思い出になる」「クラスが1つになるチャンス、合唱の技術以外の何かもつか

み取ってください」「自分が一生懸命にやらないと他の人に迷惑がかかります、クラスで団結してすばらしい合唱をつくりあげてください」「耐える、練習をさぼらない、あきらめない、練習から一生懸命やる」「合唱＝人の心だから、みんなで協力すること、1人欠けていたら意味はない、全員で歌うことが大事だと思う」「いろんな人たちがいる中で、1つの合唱にまとめるのはとてもたいへんだけど、がんばった分だけ後に得るものがその分返ってくると思うのでがんばってください」等があった。いずれも合唱を通して、感動や達成感だけでなく、全体としての一体感のすばらしさと必要性、個人としての責任の重要性等に気付いており、音楽以外の成果があったことを示している。

(三村 真弓)

#### Ⅳ. オリジナルミュージカルの取り組み (C 中学校)

##### 1. 9年生選択音楽の授業の実際

本校では、9年生の選択音楽(70時間)の学習内容としてオリジナルミュージカルを題材として扱っている。本題材は、ミュージカルの特質である総合芸術性の表現力を高めるといふ点と、本学園で研究を進めている「協同的創造力育成」という2つの観点から適していると判断しているからである。協同的創造力とは、「単に知識や技能を覚えるのではなく、共通の目的に向かって他者とかがわりながら、習得した知識や技能を生かし、新たなものを創り出していく力」のことをいう。それでは、協同的創造力育成という観点を中心に本題材をどのようにとらえているか述べていく。

##### (1) 「オリジナルミュージカル」に挑戦させることで「協同的創造力」を育む

音楽科では、協同的創造力を「自分たちの表現をつくり出そうとする力」ととらえている。本題材でそれを支える5つの要素「コミュニケーション力」「感じる力」「イメージする力」「創造力」「表現力」をどう育むことができるか、それぞれの要素について述べていく。

##### 1) コミュニケーション力

自分たちのイメージを交流するために必要な「コミュニケーション力」は、脚本、音楽などの各セクションが表現方法をお互いに交流するために必要な手段である。個人が考えていることを1つに集約し、集団の考えとするためには、思いを相手にわかりやすく伝える必要がある。意思疎通を活発にするためには、学習形態を工夫する必要がある。各プロジェクトに、核となるリーダーをおいて学習を進めていきながら、グループで進めてきたことがらを全体の場で練り合う場

面を必ず設定する。そこで納得いくようにコミュニケーションさせ、再び小グループで練り合うようにする。全体をまとめるのは脚本係である。全体でミュージカルの上演をめざし総合的に表現する場面になった時に、活発に意見交流をさせることでコミュニケーション力を育成する。

##### 2) 感じる力

「感じ方の支え」となる「感じる力」は、「豊かに感じるができるようになるための力」ととらえている。「自分なりに音や音楽をしっかりと受けとめ、豊かに感じる」ためには、初発の驚きや感動を誘発することができるように教材と出会わせることである。例えば、子どもたちが自分たちの仲間がつくった曲に出会うこと自体が新鮮であり、それが驚きや感動につながったり、表現するための意欲を高めたりする原動力となったりする。

##### 3) イメージする力

目に見えないものをありありと頭に浮かべたり、目の前の物を他の物に置き換えたりする力となる「イメージする力」は、自分たちが実際に表現する時に、「どのような感じの表現にしたいのか」を能動的に考えることで豊かに広がる。ミュージカルの表現を考える際には、とりわけ豊かに自由な発想でイメージをふくらませることが重要である。ミュージカルは、テーマ設定に始まり、脚本、音楽、舞踊、演劇、美術など、様々な芸術要素を織り上げていかなければならない。自分たちの現在の生活をふり返るなかで「今一番表現したいことは何なのか」を考えさせ、各表現要素についてイメージをふくらませていく。とりわけ、音楽については、ア。「ストーリー展開上から考えられる歌詞の創作からさらにイメージをふくらませて、曲づくりができるようにする」、イ。「各シーンの展開に必要な音や音楽をつくり出したり、選曲したりする」、ウ。「音楽からイメージをふくらませることでその音楽にふさわしい動きを考える」と大きく分けて3つの学習を進めるなかでイメージする力を育成する。

##### 4) 創造力

子どもたちがイメージを広げながら、さらなる工夫をめざすことで育成していく「創造力」は、ミュージカル上演に必要な表現を自分たちで生み出していく力である。そのためには、子どもたちの思いの根幹に「自分たちで工夫しながら、自分たちにしか表現することができない音楽をつくり出したい」というモチベーションをもたせることが必要である。表現を練り合う過程で、「自分たちの音楽をつくり出そうとする思い」は「オリジナル」という部分に着目させることで比較的可能とされやすいと思われる。本編で既成の曲を用いる

場面でも、音楽と子どもたちの表現を一体化させふくらませることで「表現を広げる力」として育成する。そして、子どもたちの創造性を広げ発展させるように仕組んでいくことが創造力育成の要となる。

### 5) 表現力

「表現力」では、「豊かな自己表現力」が求められる。ミュージカルをつくり上げるなかで、子どもたちに一番付けさせたい力である。子どもたちが「自分たちでミュージカルをつくり上げる」ということに価値を感じ、ミュージカルを通して「自分が何を表現したいのか」を大切にし、自分たちで生み出したり、選曲したりした音や音楽を表現させる。さらには、伝える相手にわかりやすく表現できるように工夫することで子どもたちの「表現力」を育成する。

### (2) 学習の流れ (全70時間)

学習の流れは以下である。

- ① テーマを決めよう！・・・・・・・・・・2時間
- ② 脚本の読み合わせをしよう！・・・・・・・・2時間
- ③ 表現の追求をしよう！・・・・・・・・・・30時間
- ④ より豊かに表現の追求をしよう！・・・・32時間
- ⑤ ステージで発表しよう！・・・・・・・・・・2時間  
(選択授業発表会)
- ⑥ ふり返りをしよう！・・・・・・・・・・2時間

### (3) 授業の実際

#### 1) プロジェクト型による学習

生徒は、ミュージカル上演のために、「音楽」「脚本・照明」「美術 (大道具・小道具)」「衣裳」「ダンス」というプロジェクトに分かれてミュージカルづくりに取り組む。各プロジェクトの特質を生かしながらミュージカルにおけるキャラクターづくりなどをすることは、イメージをより豊かにふくらませながらの表出効果がある。したがって、自分たちで実際のキャラクターを演じてみることにキャラクターに命を吹き込むための副次的な表現 (プロジェクト型の学習) の相乗効果を考えさせながら学習を進めていった。その学習過程のなかでは、各プロジェクトごとにリーダーを置き、指導者とともに学習を進める役として主体的にかかわらせることで、自分たちでよりよい表現を追求したいという思いをもてるように取り組んだ。ただし、指導者側の思いと生徒の思いをすり合わせることやどれだけ生徒の思いを尊重すればよいのか、という点においてはその場に応じての対応が必要である。また、「リーダー的な生徒の思いがすべてを決定するのか」という疑問もあるが、よりベストな表現を追求できるようにコミュニケーションを深めながら練り合うことが、こ

の題材のよさであると考えている。

<生徒のふり返りから>

・短い歌詞だったけど、時間等の都合で音楽をつくるのが難しかったです。私は、詞から曲をつくるけど、作曲家の人は何もない状況から曲をつくる時聞いて驚きました。9年生になってから2回曲づくりに挑戦して、「和音でつくっていく」とか「符号を付けたりリズムを変えたりすること」で曲の感じががらりと変わる事等、作曲の奥深さや大変さを学びました。自分が絶対満足というものはつくれなかったけれど、新しい人生経験ができてうれしかったです。これからも「自分がやったことのない新しいことに挑戦できたらいいな」と思います。

#### 2) みんなの思いを練り上げる

プロジェクトによる学習を進めるとともに、ステージをつくりあげるために全員で練り合う場面を設定する。各プロジェクトの思いを表出し、全員で練り上げていく場面となる。プロジェクトで進めてきたことを発表することになるわけであるが、よりよいステージをつくり上げるためにじっくりとコミュニケーションをとることが必要となる。自分たちが進めてきたことと他の考えが衝突をするという場合もあるが、時間をかけて納得するだけの説得力が必要な場合もある。しかしよりよいステージをめざすためには、多少の時間がかかっても、なるべく自分たちの思いが合致するように話し合いを重ねることも時としては必要である。

<生徒のふり返りから>

・脚本は、脚本係だけが責任をもつのではなくて、みんなで分担して短くなるようにしていくべきだと思う。できたら10ページ以下の台本にしないといけないと思う。もっと広い場所で1人ひとりのはりきって練習するべきだとも思う。時間があれば、昨年不思議な国のアリスのビデオと台本を見比べて研究するのもいいと思う。

・今日は新しい台本が短くなって覚えられそうだった。話し合いだけだったけれど、2時間充実した話し合いができた。話し合いによってみんなで協力して決められたのでよかった。日程をみたけど、後3ヶ月くらいしかないことに気づいた。とても遅いと思う。私はダンスも覚えられていないし。かなりまずい。曲のことも考えてみたけど、日常で「真実の愛」のような曲を聴かないのでなかなか考えが浮かびません。衣装もどうなるのかとても心配です。

・今日は新しい台本を皆で読み合わせをして、誰がどのように、どの場面で言うのか確認することができた。また、皆感情を込めて読むことができていた。そして、どのような段取りで進めていくのか皆で考

えることができた。発表まであまり時間がないので、今まで遅れてしまった分、一生懸命取り組んでいきたいです。

### 3) 集団による協同的な学びの構築

集団で学習を進めるため、より高い目標をもって努力する生徒とそうでない生徒の差が出てしまう場合もあるが、全体的には高い技能をもった生徒や高い価値観で学習を進めている生徒に感化され学習が進められている。これが協同的な学びの特徴だと考える。みんなでよりよいステージをめざして切磋琢磨することで個人の能力も高まりを見せていく。

<生徒のふり返りから>

- ・今日はダンスの新しい先生のおかげで、晩餐会のダンスを1曲つくりあげることができてよかったです。私は踊るほうで、2時間とも踊りっぱなしで退屈しなかったけれど、ずっと見ていた人は退屈だったと思います。その人たちは別室でダンス以外の人で台本の読み合わせをしたり、スタッフごとの活動を進めたりするなどして、限りある時間を大切にしたいほうがいいと思います。時間を有効に使って、それで最終的にすべてが仕上げられればいいと思います。過程を大切にしたいほうがいいと思います。
- ・今日は、脚本係の人の指導が伝わりにくい環境だったと思います。今度から場面ごとで人を集め、他の人は他の場所で練習するなどの工夫が必要だと思います。冬休みには絶対に台詞を覚えたいです。
- ・今日は一通り途中までやったけれど、あまり上手にすることができなかつたから、ダンスで毎回練習したり、休憩時間に練習したりして、思い出したいです。あまり時間がないからもっと気合いを入れてがんばりたいです。

## 2. 成果と課題

①今年度は、題材を「美女と野獣」とし、テーマは「真実の愛」ということで設定した。この題材は、すでにミュージカルとして上演されたり、アニメーションにもなっていたりしているので、比較的生徒にとってはなじみやすさがあつたと思われる。しかしそれゆえに、固定された既成のイメージからの脱却がむずかしく、自分たちでイメージをふくらませたり、新たなものを創造したりするという点においてはむずかしかったように思われる。そのため、脚本の練り直しが数度行われ、学習の進捗が遅れているにもかかわらず、生徒の危機感としては緊迫したものを感じられない状況が続く。その結果、学習が停滞気味になってしまった。これを打破するには、リーダー会などを課外で開き教師と密な連携をとりながら進めるということも1つの方

策だったのではないかとと思われる。

②今年度は、全体での合わせの時間が極めて少なく、通し練習が難しい状況であった。パートでの練習に追われる状況で、ミュージカルの総合的な質を高める時間がなかったように思われる。特に、各キャラクターの性格描写における表現手段の深化に課題が残るため、自己表現力向上においてふり返りや指導があいまいになってしまっている。

③この題材は、既習を生かして新たな文化を創造するという観点から「協同的創造力」育成に功を奏していると思われる。子どもたちの最終的なふり返りをもとにしてさらに細かな分析をし、その成果を確認したい。

④「協同的創造力」を支える5つの力が、すべての子どもに均等に育成されているとは限らない。ミュージカルづくりにおける各分野に所属して、リーダーを中心に活動するため、付きたい力において偏りが生じる場合があるかもしれない。ただし、ステージにおける自己表現は、自分におけるベストな状態を表出したいという思いで活動しているので、音楽を媒介にして表現力を培うという点においてはねらいを達成していると思われる。

(桑田 一也)



## V. おわりに

A 高等学校の実践は、「わかる」すなわち認知面を重視し、そこから題材をスタートさせるものであった。この実践の「わかる」は単に知識を教授するのではなく、実物教授と実際の体験を通して理解させるものである。これによって、学習に対して興味と関心をもたせることができ、また生徒自身が疑問や課題意識をもつなど学習への意欲が生じた。すなわち、「感じる」という情意的な成果にもつながったといえる。さらに、この認知的な成果は、「歌唱・器楽・鑑賞をするのに役立った」という生徒の回答から見られるように、「できる」というスキル面での成果ももたらしたのである。

B 中学校の実践は、「できる」すなわちスキル面を重視したものであった。理屈ではなく、感得しやすいような比喩的表現を多用し、繰り返し言葉がけをする



ことによって、合唱のスキルを体得させることができた。これは単に感覚として体得しただけでなく、アンケートの回答に見られたように、姿勢、発声法、合唱のスキル等が知識として「わかる」、すなわち認知面での成果もあったことがわかる。また、ほとんどの生徒が達成感、一体感、責任感等に関して記述していたことから、「感じる」という情意面での成果も非常に大きかったことは見逃せない。

C中学校の実践は、「感じる」すなわち情意面を重視したものであった。育成が重視されている「感じる力」「イメージする力」は、まさに情意面の力であり、

それが根底にないと「創造力」や「表現力」の育成にはつながらない。教師が大切に考えている、生徒の「思い」は、協同的な学びによる相互作用によって「感じる」力となっていく。この集団による協同的な学びは、価値観の共有という情意面での成果を産むだけでなく、主体的な活動を通して作曲や創作に関する知識を得るという認知面での成果、ミュージカルを創造し、表現するというスキル面での成果にもつながった。

以上のように、全く異なる視点から行われた3校の実践は、認知面、スキル面、情意面のバランスのとれた非常に優れたものであったといえる。(三村 真弓)